

2013年3月30日・図書新聞「文学・芸術」欄では

佐相憲一は心ひらいて呼び掛ける、 この時代を人々と共有する言葉で

「現代詩は難解、独善」という先入観を一蹴する詩集 **こたきこなみ**

まず、このタイトルに深い意味を感じる。鋼材も食材も出船入船し重機も人も動く港。内実のメッセージを熱情的に発する詩人のステージとしてまたとない場である。

難解とか独善とか、世間から敬遠されている現代詩だが、そのような先入観を一蹴する詩集だ。佐相憲一は心ひらいて呼び掛ける、平明で視野広くこの時代を人々と共有する言葉で。詩人の感性と知性で深めた詩情も批判精神も他者に届く表現を創意する。

晦渋の曇りが無いのは言葉の上だけではなく意識に曇りが無いからだ。

身近な人々との触れ合いから、時代と個人、という大きなテーマを認識性情性両面から捉える。天性の人間好きらしく、人々にごく自然に自分を開放し、弱者を思いやる。

生まれ育った横浜港を借景に、多彩な人々を包容する。

「もしかすると〈希望〉って／前を向いている時の／後ろ姿／なのかもしれません」

含蓄のあるフレーズである。

よく安易につかわれる希望とは、走らせる馬の鼻先にぶら下げられた人參の謂である。そうではなく、背後から身を支える人知れぬ自負のようなもの、であろうか。希望の裏表を知る人の言なのだ。「そんな中でも／今日、どこかで権利をみとめられたひとがいて／今日、どこかで結ばれたひとたちがいて／海はつながっています／心の波打ち際から／今夜／各地のひとたちの／後ろ姿へ／この詩を贈ります」（『波止場』部分）

すこやかで活力ある筆致である。とかく詩情とは悲観のほうにつきたがるが、それは逃げかもしれない。トライすれば案外順調に事が運ぶこともある。行動力をもつ詩人の洞察力に読者は励まされるだろう。

この向日性は子どもたちの教師であった所為でもあるかもしれない。

『波音Ⅴ』塾での授業で、生徒たちとの絶妙な大阪弁の会話など、大いに楽しませるが、いつとき子どもたちの父親気分にもなったりする。このことはⅦで語られる自分の父へのこだわりとも無縁ではないだろう。そのような他人志向のなかに、今まで現代詩の題材にならなかった、「夜の女へのレクイエム」がオフィスレディへの詩に並ぶ。弱者の辛さを思いやれる苦勞人なのだ。

「深夜コンビニで見かける孤独な背中」「これから朝にかけての仕事は大変だろう／転々としながら必死に生きるあなたたちの人生はぼくに親しい」（『野良猫の開港』部分）

『波音Ⅶ』は出自を遡り明治期の戸籍簿を追跡調査しての父祖の記載が興味深い。読者にとってはアカの他人で、地名や人名以外の情報は無いのに、身内のようにリアリティを感じ、わが家系の来歴をも思い致すのは、庶民感覚として普遍性があるからだろう。

それはそうと明快な人柄らしい佐相自身の私性には葛藤めいた拘りはないのであろうか。『波音Ⅷ』では、ある日波止場で、幼児期離別した父親を思わせる年格好の人を見掛ける。このあたりの微妙な心情は、現代多い同じ境遇の読者に共感されるだろう。フィクションとしても、詩人と同じように海を眺めにきているその初老の人に、自分と同類の匂いを感知したのだった。

このような内面の陰翳が読む者の胸に深く留まる。

さて私性の最たる恋愛が登場せぬのは、ちとさびしいと思ったら、ありました、『恋』が。「星からうまれたとは意識しない暮らしの空で／今日 生まれる関係」「人類なんて意識しない日常の砂浜で／今日、ふたりは人類である／流されたかなしみを流さずに／押しつぶされたくるしみを押しつぶさずに」。七十行にも及ぶ長詩の冒頭の一部である。

レトリックの巧みさ、単に比喩などという以前に、ものの捉え方感知力が斬新なのだ。

内実重く、多様な人間が登場し庶民感覚の錯綜する世俗にありながら、俗塵に巻かれず自分の主体性をたしかなものになっている。比較的若手なのに成熟した詩境として、稀有な存在である。（詩人）

と紹介されています。